

ヨハネ21章「浜辺での朝食」

21:1 この後、イエスはテベリヤの湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。 21:2 シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいっしょにいた。 21:3 シモン・ペテロが彼らに言った。「私は漁に行く。」彼らは言った。「私たちもいっしょに行きましょう。」彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。 21:4 夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。 21:5 イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」 21:6 イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。 21:7 そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとって、湖に飛び込んだ。 21:8 しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。 21:9 こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。 21:10 イエスは彼らに言われた。「あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。」 21:11 シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かっただけでも、網は破れなかった。 21:12 イエスは彼らに言われた。「さあ来て、朝の食事をしなさい。」弟子たちは主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか」とあえて尋ねる者はいなかった。 21:13 イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。 21:14 イエスが、死人の中からよみがえってから、弟子たちにご自分を現されたのは、すでにこれで三度目である。 21:15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」 21:16 イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」 21:17 イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。 21:18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」 21:19 これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであった。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」 21:20 ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれですか」と言った者である。 21:21 ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」 21:22 イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」 21:23 そこで、その弟子は死なないという話が兄弟たちの間に行き渡った。しかし、イエスはペテロに、その弟子が死なないと言われたのではなく、「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか」と言われたのである。 21:24 これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている。 21:25 イエスが行われたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う。

導入

英国の私の故郷の町から数キロメートル離れたところに、ビアという美しい漁村があります。

そこは、「浜辺で朝食」を食べられる英国では珍しい場所です。

浜辺の朝食を提供しているカフェは3軒あります。

写真の中で閉店している緑のカフェが私のお気に入りの店です。夏にお客さんが来ると、お天気の良い日にカフェで英国式の朝食をごちそうしてもてなします。白亜の断崖を朝日が照らす風景、小石の海岸に静かに寄せる波の音、そしてベーコンの焼ける匂いが、素敵な場所で過ごすゆったりとした時間を演出してくれます。

けれども、今日皆さんにお話するのは、別の浜辺での食事についてです。この浜辺の朝食には、大切な霊的意味合いが込められています。

この浜辺はガリラヤ湖の湖畔でした。ガリラヤ湖はテベリヤ湖とも呼ばれました。

この21章は、これまでの福音書でヨハネが確立したパターンに従って読むのが大切です。ヨハネの福音書で、ヨハネがイエスのしるしや奇跡について言及する場合、その解き明かしが主題であり、教えをとおして詳細に説明されます。一例を挙げると、ヨハネ6：1-14でイエスは5千人に食事をさせた後、22-59節でその奇跡の霊的な意味を説明なさいます。

このパターンによると、ヨハネはまず大漁の奇跡について語り、その後、この奇跡の霊的な意味についての説明が続きます。

イエスとペテロとの会話は、イエスの羊を飼うことについてです。この羊とはこれからイエスの弟子となる人々を指します。イエスは、奇跡を起こしてとれた魚を弟子たちに与えられました。ですから、この最終章は、イエスが使徒たちに食事をさせた出来事が中心となります。

イエスは使徒たちに魚という食べ物を与えて養われました。そして、ペテロをもう一度使徒の代表として立ち直らせました。ペテロとすべての使徒たちが神の民を養うようになるためです。

ヨハネの福音書の最後に登場するこのしるしは、20：31に登場するこの福音書の目的と調和します。

ヨハネ20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

ヨハネはこれらの出来事を記録することで、イエスを神の子と信じるための証拠を十分に読み手に与えています。

この章はふたつに分けられます。イエスが使徒たちに食事を与えた1-14節と、イエスが使徒たちにイエスの羊を飼うよう呼びかけられる15-25節です。

1. イエスが使徒たちに食事を与える。(1-14節)

ペテロと弟子たちの一行は、ガリラヤ湖で夜釣りに出掛けました。釣りには夜が一番適しているにもかかわらず、その日はまったく釣れませんでした。ベテランの漁師だった彼らは、夜釣りで一匹も釣れなくてずいぶんがっかりしていたことでしょう。

朝、岸边に到着すると、そこでイエスが彼らを迎えます。

ペテロと弟子たちは、湖畔に立っているのがイエスだとは気づきませんでした。

魚が釣れたかどうかイエスが尋ねると、彼らは釣れなかったと答えました。

するとイエスは、「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」とおっしゃいました。

彼らがイエスの言うとおりにすると、網を引き揚げるできないほどたくさんの魚がとれました。

これは信じられないような奇跡です。イエスは、朝食153人前を用意できる魚を与えてくださったので、魚を舟に揚げ切ることができませんでした。

そのとき、舟の右側に網を下ろすよう教えてくれた湖畔の人がイエスであることに、ひとりの弟子が気づきました。岸边から教えてくれた人がイエスだと聞いたペテロは、服を着て湖に飛び込みました。よみがえりのイエスとの再会が待ち切れなかったのでしょう。

ペテロは、魚のことは他の弟子たちに任せました。イエスが与えてくださったものよりも、イエスご自身に心を寄せたからです。

全員が湖畔に戻ると、イエスはすでに火を起し、魚を焼いておられました。そこにはパンもありました。

10節で、とれたばかりの魚をいくつか持ってくるようにと、イエスは弟子たちにおっしゃいます。

皆さんはご存じないかもしれませんが、とれたての魚は味が違います。その味は格別です。

私たちは英国で、ある漁師から直接魚を買ったとき、そのことを教えてもらいました。実際食べてみると、最高においしかったです。

話を元に戻しましょう。11節で、弟子たちは網を破ることなく無事153匹の魚を岸まで運びました。

イエスは弟子たちに朝食を与えてくださいました。弟子たちのために起こされた奇跡であり備えでした。

どんなにすばらしい朝食だったことでしょう。ガリラヤ湖に朝日が昇り、よみがえったイエス・キリストとともに焼きたての魚を食べたのですから、これ以上の経験はないでしょう。

この奇跡自体を深読みする必要はありません。この後に続くイエスの教えが重要な部分です。

ヨハネは、イエスが死からよみがえって弟子たちにご自身の姿を現されたのは3回目だったと言って、この前半部分を締めくくります。

2. イエスが使徒たちにイエスの羊を飼うように呼びかけられる。(15-25節)

この箇所は、おもに3つの部分に分けられます。まず15-17節で、ペテロが立ち直り、主の元で仕える羊飼いとされます。次に8-22節で、ペテロにとってイエスの羊を飼うとは、死までイエスに従うことだと告げられます。そして、23-25節で、ヨハネは死なずに生きながらえてイエスのことばや働きを記録します。ヨハネは、現在に至るまでも福音書をとおしてイエスの羊を養い続けています。

a) ペテロが立ち直り、主の元で仕える羊飼いとされる。(15-17節)

イエスはペテロに3度同じ質問をなさいました。その質問は、「あなたはわたしを愛しますか。」でした。

質問を3度繰り返すことで、18章に記された出来事が思い出されます。それは、ペテロがイエスを3度知らないと言った話です。また、ペテロがイエスを知らないと言ったのもたき火のそばだったので、その記憶がさらに鮮明によみがえったでしょう。

ペテロは、18章に記されたイエスを知らないと言った出来事を打ち消すチャンスを得ました。ペテロは他の弟子たちのいる前で、イエスを愛していると改めて3度宣言することができました。

最初にイエスがペテロに「わたしを愛しますか」とおっしゃった際、「この人たち以上に、」とおっしゃいます。

日本語では「この人たち以上に」と限定された訳となっていますが、原語では「これら以上に」で、それが指すものにはふたつの可能性があります。

まず、ペテロの漁師という職業についてという可能性です。イエスは舟や網を指し、職業や暮らしを捨てて私に従い、わたしのために働くほど、わたしを愛しますか、とおっしゃったのかもしれませんが。これは、ペテロに対する究極の呼びかけです。ペテロは、イエスに従い、神の民を養うために、生業を捨てる覚悟があるでしょうか。

もうひとつの可能性は、日本語訳が示すとおり、「仲間の弟子たち以上にわたしを愛しますか」とおっしゃったというものです。

イエスは、ペテロが「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」（マタイ26：33）と言った夜のことを思い起こしておられたのかもしれませんが。

または、かつては自分だけが忠実を貫けると思ったペテロが、試練のときに弱気になってしまったことをやんわりと指摘しておられたのでしょうか。

おそらくこの意味は、先ほど引用したマタイの箇所のとおりでしょう。イエスはペテロが知らないと言うこともあらかじめ言っておられましたし、もともと漁師の職を離れることはペテロにとって問題ではなかったからです。

ここで大切なのは、イエスを愛するにはイエスの羊を飼うことも含まれる、とペテロが教わったことです。

今日ここで、イエス・キリストを主であり救い主として信じているクリスチャンの皆さんに、私から問いかけたいと思います。

それは、イエスがペテロに問われたのと同じことです。皆さんは、イエスの羊を飼うほどにイエスを愛していますか。今日の教会でもっとも必要とされているのは、弟子作りのできる弟子たちです。つまり、新しく信仰を持ったクリスチャンや、弟子訓練を受けたことのないクリスチャンと一対一で時間を過ごす成熟したクリスチャンのことです。

この後の祈りの時間に、この問いへの応答をする機会を設けます。

「イエスの羊を飼うとはどういうことだろう」と考えてみるのもよいでしょう。

答えは常にみことばの中にあります。ヨハネの福音書全体を読めば、羊を飼うことには、イエスのことばや業について教えることが含まれるとわかります。

イエスが死なれる前は、ペテロの理解は乏しく、イエスの羊に語れるメッセージはありませんでした。しかし、ペテロは赦しと永遠の命について神の民に語るべきメッセージがあることを理解し始め、イエス・キリストのことばと業について教えるようになります。

ヨハネの福音書の読者は、イエスに属する人々を養うという具体的な使命を受けた使徒たちを改めて信頼することができます。

b) ペテロは、彼にとってイエスの羊を飼うとは、死までイエスに従うことだと告げられた。(18-22節)

イエスは、ペテロが将来どのような死に方をするか語られました。

それは、イエス・キリストご自身の死に方に似ています。つまり、十字架刑です。

ペテロの死についての預言は、ペテロが完全に立ち返ったことを強調します。使徒ペテロの証は信頼できるのです。

この部分で大切なことは、私たちも弟子たちの教えを信頼できるということです。

ここで、ヨハネ12：23-26を読みましょう。

12:23 すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。12:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるのなら、父はその人に報いてくださいます。

よみがえりの主イエスは今も、実を結ぶ奉仕をするよう弟子たちを召しておられます。

神は、イエスに従って仕えるためにいのちを捨てる弟子たちを重んじると約束してくださいます。

南米のアウカ族に伝道を試みて殺された有名な宣教師ジム・エリオットは、「ずっと失わないものを得るために、持ち続けられないものを手放す人は、愚かではない」と語りました。

バプテストの宣教師アドニラム・ジャドソン（1788-1850）は、北米からビルマ宣教に派遣された最初のプロテスタント宣教師として仕え、その人生をささげました。最初に18人が信仰を受け入れるまで、12年もかかりました。彼は生涯で100の教会を開拓し、その教会員の数は8,000名を越えます。バプテスト教会では今も、この国にジャドソンが到着した日を記念してジャドソンデーを祝います。

アドニラム・ジャドソンほどある国に大きな影響を与えることは私たちにはないかもしれませんが、私たちが自分のいのちをささげようと決心するなら、神には私たちをとおしてなさろうとされることがあります。それが何であれ、尊いことです。

c) ヨハネは死なずに生きながらえてイエスのことばや働きを記録した。（23-25節）

ここでヨハネは、自分自身について語り、使徒が全員いのちを捨てるよう召されているわけではないことを明らかにします。ヨハネはイエスから記録という形で羊を飼うようイエスに任命されました。彼は、イエスのことばや働きを記録したのです。

イエスは、弟子たちひとりひとりに違ったご計画と目的をお持ちでした。そのご計画を知るには、主のために喜んでいのちをささげることです。

適用

1. 復活から昇天の間にイエスが重視されたのは、ご自身の民が使徒たちの教えをとおして養われることです。ですから、私たち自身もその教えに養われることを重視しなければなりません。神のみことばで養われる教会の礼拝にできる限り参加しましょう。教会は娯楽施設ではありません。

また、神のみことばに養われるよう他の人を励まし仕えることを常に心がけましょう。

2. イエスご自身が羊を養うことを重視されたのなら、イエスの御声を知って従う私たちは、これを重視する必要があります。これに関して、私たちはそれぞれ役割があります。それぞれの賜物や才能を用いて、耳を貸してくれる人なら誰でも神のみことばを告げ知らせましょう。